佐藤　奈菜

今回このワークショップに参加して、私は多くのことを学びました。最も印象的だったのは、ロシアでは放射線が特別なものと思われていないことです。

福島第一原子力発電所の事故が起きたとき、私は高校生でした。日本のみならず世界中に福島についての情報が出回り、中には誤ったものもありました。県外に避難した時に差別を受けたことがありました。その経験から、日本の外でのセミナーを恐れる気持ちがありました。しかし、ロシアで差別を受けることはありませんでした。学生は放射線をただ怖いものとは思っていませんでした。背景には、教育システムがあると考えました。ロシアでは、すべての学生が放射線について学びます。放射線について勉強することは特別なことではありません。日本では、医療従事者、特に看護職者は、学ぼうとしない限り放射線について学ぶことはできません。私は、このように日本でも学べるようになってほしいと思いました。

また、私は保健師として働いています。被災地の保健師は、福島第一原発の事故後、住民に放射線と健康影響についてのリスクコミュニケーションを行う役割を担っています。講義で、福島で得られた知見はチェルノブイリですでに起きていたと知りました。事故後どのようにリスクコミュニケーションを行うべきなのかを改めて考えさせられました。私たちは国を超えて過去に学び、未来につながなければなりません。今回学んだことを今後に生かしたいと思います。